『椿説弓張月』拾遺二

椿説弓張月

拾遺[illegible]二

（鎮西八郎為朝外傳）椿説弓張月拾遺巻之二

東都　曲亭主人編次

第四十九回

三畧を述て松壽鶴を救ふ
鷲巣山に李趙首を喪ふ

典膳所。和義令の官人等ハ。鶴が井の中より声を發るを聞て。いよ〳〵盗賊なりとし隼雄の壯佼両三人戟をもて刺んとすれバ。老兵等慌しく推禁めていふやう。りしそのものを引揚ずして刺とらじ。供御にまゐらする水を穢さぞ。却て吾儕の越度となるべし。生捕るも殺すも。まづ縡の趣を。聞えあげてこそと。いへバ衆皆これに從ひぬ。壯佼等ハ器械を合して井を戍て老兵を内に招りて利勇に縁由を訴ぬ。この時利勇ハ既に臥房に入りたりけれど。この訴を聞て岸破と起。それハ凡庸の盜賊にあ

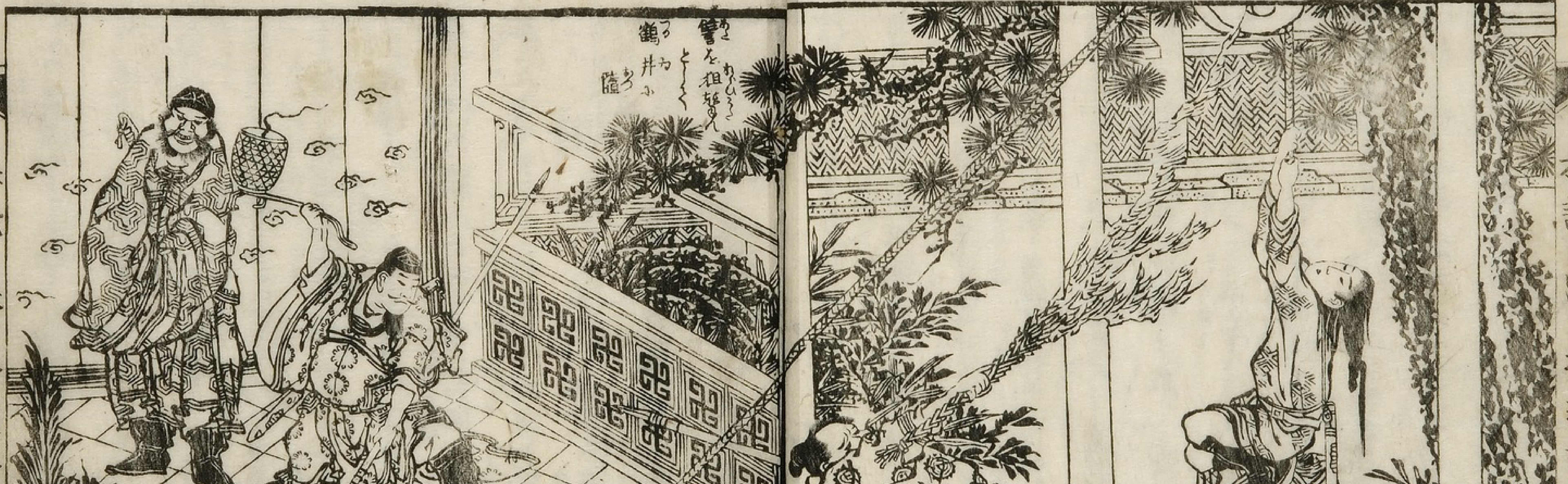
椙山女学園大学図書館之印

あらじ。曚雲が間者なるらんに。はやく松壽に告しらして。四門を固めよ。われこそかう出ぐ。衛の為侍を召るべきぞと。答も果ず。枕方なる劍を帯て。里之子に指燭を秉らせ。急ぎて典膳所に赴れて。婦るらば老兵らに縴の容をかたらふ。且く頭を傾けつゝ思ふやう。曚雲は幻術に長じて。彼が間者なれば。風のごとく走り。煙のごとく滅失なんも量がたし。縦井の水を穢すとも。大事の敵をとり逃さんにはまされり。只刺殺せと下知すれば。はじめ刺んといひし壯佼に。うけまうると答もあへず。持たる戟をとりなほして。突くださんとする折から。松寿忙しく走り来て。戟をとめて刺んとせし壯佼を叱退て。利勇に對ひ。今宵の椿事は。今老兵して。はじめなふによつて。その緊略をしれり。かぞかりれ僻者なりなど。て生拘りしにあらざれや。引出さしめんといひかけて。立んとするを利勇

呼びとゞめて。腕をうち掉。軍師甚麁忽なり。曚雲は幻術あり。彼が間者なりせば。隠形の術なからんや。これを生拘ることは難く。殺さんことはいと易し。さはあらばや。ときより我に顕れていふも傷痛く。松壽は信と容をあらため。古人も。鼠に投るに器を忌といへり。彼ものを引揚ずして殺さじあるぞ。器を投て鼠を打にひとしく。井を失へば我に損あり。この城は元来水に乏し。雛を裂に牛刀を用ひまふはいかなるぞや。縦曚雲が従兵なりとも。こゝその術をしるべからじ。凡隠形の術は四ッあり。水遁といひ。火遁といひ。木遁といひ。土遁といふ是なり。水遁は江によりて隠し。火遁は火をかえて形を隠し。木遁は木に隠れ。土遁は土に投ず。這奴井に落て得も出ず。手を束て縛をうけつるものは。遁るゝに術なき故なり。思ゝ忠を費し給ふ事なかれと憚る気色なく諫れば。利勇は

心もとなくやひねがふ。さらバ引揚よと下知するにぞ。衆皆釣瓶の索を手繰おろしけり。井の底をさし覗れ。目今引あげ得さするに。索の端に携りてよと喚びかけて。手ふく索が引かるゝに。立地に引揚らる。矢庭にこれが縛めけり。さて燭を秉て。件の癖者をつらつら見るに。思ふに似ず年紀十四五ばかりなる美少年なりしかバ。衆皆呆果て舌を吐きし。言語を出すものなし。當下利勇ハ鶴がいはまく。這奴。曚雲に劣ざる幻術あればこそ。かゝれ美少年に化て。人を眩惑し隙を窺ふて脱去んやあらんずらん。大約幻術ハ。形を変ずるに。穢きものを注でかゝれバ。その術忽地破るといへり。しかれども。這奴を引出して。糞汁をうち被よと下知すれバ。鶴ひざまづきいふやう。某全く野仙ならじ。大里山なる獠者の児子に。二郎金と呼るものなり。鶩の羽を賣んとて。毎日に城下に

往来しつるが。きのふより放されて。城中へ出入する程に。その典膳所とかいふ処へ。山海の珍味夥あり。世にあらんぞひでに。かゝれバ美酒佳殽が一叉なりともたうべさらんとおもひし心さへ。はきてはひしがるに。彼此と巡は間に日ハはや暮て。城門を鎖し。出べき方もなけれバ。半蔀の蔭にあるきぞやとおもふに。登りしものゝ。いとはしければ。こゝろ鈍くも潜入んとして。忽地に井に落られし。あられ命を助てたべと。實志やかに歎けり。利勇これを聞て。左右をかへりみ。這奴を認ぬものありや。と問ば一人の老兵すゝみよりて。熟とうち觀り。寔にこのものハきのふ鶩の羽を賣んととく参りしものなり。といふに。利勇且く尋思しつ。いはく這奴が為体のいひざまさへ。獠者なんどの子にはあらじ。あれ見よ。膚に身甲を被たり。今その声ざまがきくに。毛國鼎に似るのみならず。面貌も又彷彿たり。



響を相雛えとしく
鶴井に隨

こハ疑ふべうもあらね。國鼎が孩児鶴なり。父があへなく討れしハ。みせし罪科としらぐれに身をおく処なきまゝに。私の怨をもつて。これを狙撃んとせしこそ奇怪なれ。とく引出して首を刎よ。といひまた高く下知をすれバ。鶴ハふるゝなく見透されて脱れがたしとおもひつゝも。怒れる眼に涙を含て。背へまはせし拳を握り利勇に走りかゝらんとて。其ずうしろへ引うて索に。撲地と轉びしが。膝立なほして嘆息し。あゝわれさきハ名告に及ばねど。國の為に忠を盡せしわが父に何の罪かある。これみな是汝が讒言の。舌の根切て亡父の寃をそゝふ雪んとて。夜な夜な寝戟を枕とし。忻よりられかどひもなく。命運終に全からで。かく縛られし上ハ。今ハ一日も存命るのを願ず。恨らくハ利勇阿公が首を捩て。孝を考妣に得も盡さず。殺さバ殺せ。九ッの世を經るとも灵を引て飽までに。思ひしらさで已ん。と声高やかに罵れバ。利勇呵く

と冷笑ひ。汝釜中の魚となりて。なほ身の分際を志らざる。譬ハ蚊蚋の山を負ひ。精衛とらふ鳥の。海を填んとするに等しく。生てかふ及ばぬなるに。身後を憑むハまさく愚なり。われが毛國鼎を誅せしハ。仰によりてその罪を正せり。阿公が志ることにあらぬど。といはせもあへず声をふり立。いへバとていはるゝものかは。よしや人を欺くとも。いかでか天地を欺くべき。汝等が奸計ハ。曚雲國師の口つから聞つきりとても。なほ争ふや。と只一句に説破れバ。利勇ハ窮も。あへず大なる丹鷲丸剣を抜て走りかゝれを。松壽衛ともろく推とゞめ。大臣一時の怒に乗して。その少年を殺しなバ。敵に英氣をそふるなり。なかなか曉沼あかざれ。某頃日間者を首里へ遣して窺せしに。毛國鼎が子ども鶴亀ハ寧王女に冊きて。小琉球なる嶋北に脱れ去。主従赤瀬の碑石のほとりに。ぬかく潜びて居られしを。曚雲よく志りて。夥の筑登之に禍獣

を牽し。彼嶋に追渡らせて主従を撃んとせし折から。天孫氏の威霊によりて。禍獣ハ土中に滅し。王女ハ不思議に祐けを得て何地ともなく脱去ぬ。斯て賊兵等を辛じて鶴亀同胞が擒にしたり。是を以て首里へかへりにければ。曚雲件の胞兄弟を憐ミ。窃に謀略を示して大臣を撃せんとせしかれども。大臣の運高くして。今夜鶴を生拘のへり某つらく。曚雲が奸計を察せられに。鶴より大臣を撃ハ速に火を放て。暗号とせよとて賺せるなるらん。しらふが大里長川わたりの山蔭に。軍兵数伏おきて短兵急に此の城を。乗とらんとてこそ計較けめ。亦鶴等に便宜を得ずして擒とならば大臣怒りてこれを殺したまひなん。さるときハ。大臣私の怨をもて孝子を殺したまへりといはん。毛国鼎ハ世家にしてよく民の心を得たり。今曚雲が討せして。名家の児孫を誅したまはば。これ民の望を絶なり。民の望が絶

ときハ。軍威震ぞ。軍威震ざるときハ。この城なぐたもちがたし。只いく度もそひかへして世の侮を禦たまへと。席を拍てぞ諫られ。その辨舌爽にして水の流るゝがごとく。ことわりに稱ひしかば。利勇ハ呆れて接ぎなせし。剣をもとの鞘におさめ。さりとてハいかにせん。軍師計策ありやと問ハ。松壽莞然とうち笑て敵の謀に就て謀を行ふときハ易し。されども。大臣こゝに用ひたまはじ。といふに利勇忽地に氣色を変。軍師いかなれバ。われをつゐることの等閑なる用ると問されとハ。縡の便宜を擇ばしなくといそがせば。松壽左右を見てかへりて。こゝに侍る徒ハ。こなた腹心のものなれど。謀を密にするをよしとす。且く遠離なべしといへバ。利勇頷く。瞎をもてその意をしらされハ。典膳ほか所の官人等ハ。里之子とすろともに鶴が引立て退出けり。當下松壽ハ膝をすゝめて声を低くし。大臣曚雲を滅さんとならバ。徳をもて怨に報ひ。

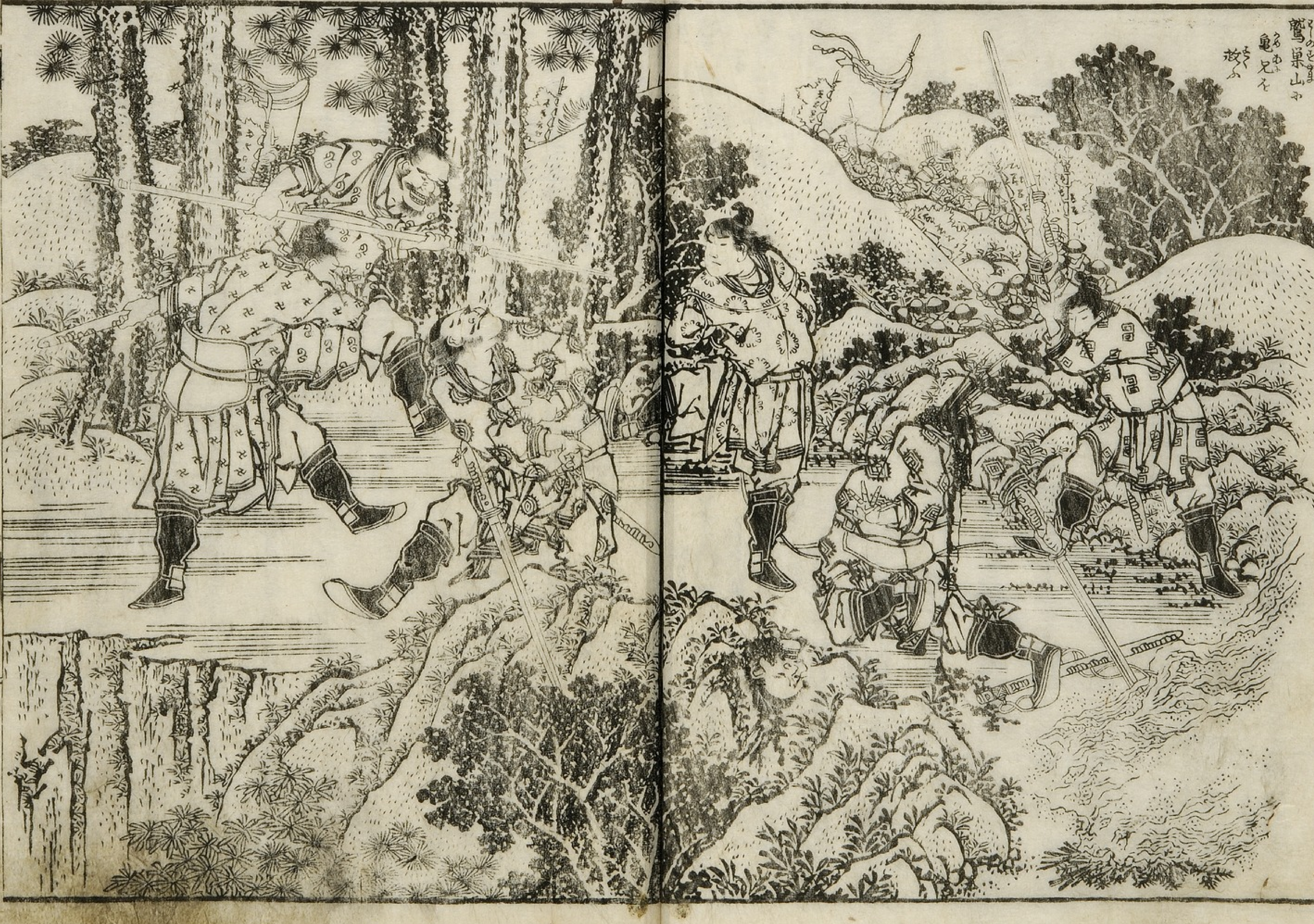
鶴が免して中城の按司に任じ。絶たる家を嗣しめん。あるときハ。一旦禍獣に害怕て。曚雲に降参せしものも。愆を悔。徳を慕ふて。もとにかへりてまゐるべし。直を挙て衆の曲れるものが措ときハ民従ざといふことなし。これハ是。戦ずして勝の謀にして。行ふに難からず。用ひあらば幸甚しといふ。利勇これを笑て眉を顰め。鶴ハ逆臣毛国鼎が子なりけりこれをしも重用して。按司とせバ。賞罰に干て正しからず。これハ決して用ひがたし。別に謀ありやと問ハ。松寿答て。某既に三の畧を定む。今いふ所ハ上策なり。亦中策あり。下策あり。これを行ふことハ却難し。さりとも。己に勝れりといふ。利勇かさねて。何をか中とし。何をか下とする。それ聞くべしとて耳さし寄すれバ。松寿も額をはきあハし。今夜曚雲兵を出して。鶴が城に火を放るが待せるならん。さらバ天の明ざる間に。紀登之がよりて。鶴を大里のあるじとなされ。鷲巣山に引列し。能く首が列る為体をせさしなバ。曚雲が軍兵ホ。その謀の漏るゝかとて。慮て首里へ帰るべし。そのとき某四五百の逞兵をもて。長川をさし塞ぎ。これを撃ハ鏖にせん。かくて鶴を。城中に引入れて。松寿に領まへ後。亦謀あり。これを中策とす。又下策とハ。鶴を賞せず罰せずして放ちて帰らしめなば。曚雲其意を量りかねて。かろ〴〵しく南風原に寇をなすべからず。大臣この二つのものを択ミ給へ。夜もいたく深けるに。あけなばそれもかひなしと。いそがせバ。利勇はく〳〵とうち笑て。下策ハ行ひ易しといへども。鶴を放かへさんことハ謀の足らざるに似たり。これその中を執べしとて。心腹の紀登之趙豹李虎を呼びて。機密を低語ハ。件の事人こゝろを得て。やがて鶴が引立五六十人の兵卒を従へて。直に鷲巣山に赴くにぞ。松寿も夥の軍兵を率て

城を出て宇平の北なる長川大里を投て走らせけれ。さる程に。爺は兄に諫られて。こゝ深すゝびも残りとゞまり。城溝のほとりにすゝむ程に。星の光乃深ゆくのみ。暁がたちかくなりぬれど。絶て音づれなかりしかば。かくてあるべきにあらずとて。潜び入らんとする折から。忽地城門をおしひらきて。兵卒五六十人毎手に器械を把て。蕉火をふりてらし。鈞をいたく縛めて。真中にとり囲み。北を投てぞいそぎゆく。亀はこの形勢に吐嗟とぞうち驚き。多勢が中に殺て入り兄弟もろともに死んぞと。刀の鞘に手をかけしが。ふたゝび思ひめぐらせば。目にあまる大敵に。かけ逆ひて。果敢なく死きさるも得せぞ。同胞一脊討死せんは。大きなる不孝なりと。うつそくも識る。兄が言語の耳底にとゞまりぬれバ。さもこそとかされ胸を撫て仂なく打も莵らどもせん。かくせんと躊躇バ。赤軍兵四五百人ミ

つゞきて城を出ぬ。かくてハいよ〳〵及びがたしとおもひ入て。忙しく懐より續松をとり出し。敵の振こほせし火をうつして。前なる士卒にうちまじて兄が先途を見果んとて。後方に跟くのみともに走れども。烏夜なれば人怪しまず。趙豹李虎を松寿に先だちて。只顧に路をいそげバ。川良の橋をこゆるとて辨嶽のあなたなる鶯巣山に来けれど。冬の夜のことなれバいと長くて。その夜ハいまだ明ざりけり。その地方北ハ辨嶽につゞきて茂林ふかく。南ハ岨高くして屏風を建るごとし。されバ利勇ハ松寿が謀を用ひとらへども敵を拉ぐにこゝろなく。只路をのこらずせくそひて後の患なからしめんと。趙豹李虎に耳語しかバ。件の両人領諾して鶯巣山に到るとやがて敷皮のうへに誘ひ引すゑ。松寿ハ汝が助んとて。さま〴〵にすかせしが。その謀迂遠し。汝ハ既に曚雲が刺客となり。汝が城中に潜び入られバ。大臣決して放さるまじぞ。

よりて首が刎るなり。命をしくハ寧王女の住方を告。鶴亀が所在ハいへ。いそぎやいへと左右より。いと囂しく責問バ。鶴を閉られ眼を睜て趙豹と李虎をえ見て。親の仇人を撃ざらんと思ひしかはしその日より事ならぞそかくあらんと豫て覚期の鶴れ命が惜みて今まで何をかいふぞえ。汝ホ斬らバとやく斬れ。利勇ハさらなり。汝ホが運竭て生捕られ敵に首をあらふ将とれ。思ひ来すらめと冷笑へバ。両人等もあへぞ大れに怒り手に似げなれ膽の太さよ。その世の暇とらせんと罵もあへず。趙豹袖を巻あげて鶴が後方に立繞り。氷なす刃が抜て白く清まれ。鶴が項の毛を数回撚あげて。刀尖高くふり揚バ。暗れ樹蔭に身を倚て絆の容が闕窺られ。亀ハ忍ぶがえも忍がで。勢ひ猛く走り出て。拿る刀を閃し。趙豹を礙と砍バ。首ハ鶴を飛越て。遙向ひへ落たりけり。

李虎これをみて驚き遽刀が閃りと引抜て亀を砍らんとする所を鶴まず身を起して足を飛し李虎が臑丁と蹴る。蹴られて阿呀と叫びもあへず。仰さまに倒れよりその隙に亀ハ刀をとり直して兄が縛を切解バ兵卒等いふ立さわぎて。戟を引提剣をうちふりて。八方より撃てかゝれ亀ハ多勢にてしなひ。命を限りに戦へバ。鶴を蹴られて起んとするれ。李虎が刀を奪ひとりて起しもたてず脊より乳のよ下までぐさと刺しぬく刃に瀆る。鮮血に染りて忽地に岨踏外して谷底へ滾々と輾墜。生死もしらずなりぬれど。亀ハ救ふに遑あらざれ右を打ち左に靡け。三人に痍を負し。二人を矢庭に切ふせど。大勢なれバ物ともせず喚叫びて攻られバ。既危くみえたる折から。忽地喊声が[illegible]に響し直冑の武者四五百騎。樹ぶちの隙よりかけ出たり。その勢ひ潮の



鷲巣山（わしのすやま）に亀兄（かめあに）を救（すく）ふ

涌がごとく。當るべうもあらざれバ。南風原の兵卒ハ。戦ずして碎易し。株に迯き。おのが刃に掣れ命を隕すもの廿餘人。その餘落穢て負ねもあり。右散右散に迯まれバ。敵の大将真先に馬を出し。逢しかへせと呼ゞり。この大将ハ別人にあらず。曚雲が謀によりて。大里山のほとりに屯し。鶴亀が暗号せバ。南風原の城を乗とらんと。准備しける耳目官全廣なり。この日曚雲ハ高樓に登りて。鶴亀が敵に苦らるゝを見てけれバ。足捷兵なる利勇が士卒を撃ちらし。鶴亀をも刺殺せよ。よしや撃漏さるゝものありとも。長追ひなすべからず。敵に新手の加るならバ。速に引かへして。辨嶽の麓に出。其処なる山兒等が家を乱妨して立かへるべしと下知せしかバ。全廣ハその期を違ず。大里山より馳来りて。軍兵を二手にわかち。半ハ迯る敵を追ハし。

半ハ亀を狩せしかバ。亀ハ毒蛇の顋を脱るゝごとく。虎狼にあへるこゝち。刀をすてゝ箭を切ちらし。且くこれを防ぐといへども。脱果べうもあらざれバ。今ハ命をかぎりのふじて。死をも兄弟なるもに。あゝ山邊の土とならんと思ふをり。むかうをちらさそ身を翻して。谷底へ真逆さまにと轉び落るに。君真物の擁護にやよりけん。露ばかりも身を傷らず。さそうろうも恙なかりしかバ。と憑しくて。阿公々々と呼びかくれど。松ふく風のみ答して。かれ探れども物もあらず。たゞ脱去たる狐狸。猛き獣もあるべかれバ。いかになりきてしひとんじや。なりけんやとも。せめて屍を見せてよべ。長き別の獲なるかな。夜も明のを思ひれど。谷蔭すれバなを暗く。其処此所と呻吟て。出るともなく立めぐり。ひとすがらふる。石滴を掬べバえもかくた。濡る袖にも宿る星の影も寄るとてはの。ゝのと明ゆくかたの山鳥。それに無常を告るごと。ひとかれ峯の雲涙の雨

果しなく惑ひハいよ〳〵はれぬなるべし。

第五十回

樹を離るゝ孤猿命を保つ
鷲を獲て漂客櫃を開く

松寿ハ趙豹李虎等に引つれし夥の兵を将て。長川の上に赴き。まづ斥候を遣して大里山なる敵の毛を窺せるに。そのもの聽く走り帰りて。彼山の頭にハ。敵一騎もみえずといふ。松寿これを聞ていふやう。曚雲が奸智をもて彼処に軍兵を伏おかざるもしる得からじ。そハとまれかくまれ大臣こゞ謀のなよろしきものを用ひぞ。趙豹李虎をもて。鷲巣山に引むかハせしハ。敵を劫を為にハあらで。彼を殺さん為なるべし。これ今急に救ざれ。窮鳥終に生ぐさかゝらんあつまりくど。ひとり息延。俄頃に手わけして士卒三百餘人に長川を戍らしむ。その身ハ軍兵二百あまりを将て。駿馬に鞭を鳴らし。鷲巣山を投て馳る程に。はや山の麓にいたらんとす。斯る処に。全廣に追打せられて逃下る趙豹李虎が従卒等。他なく松寿に礙とゆきあひ。ほのぐらく明そむる。山風に翩翻と閃く旗ハ正に是身方の軍兵也。と見えけれバ。狩場の雉子の草隠れせしこゝちして。軍師吾備を救あへ。救ふべしと呼ひめぐらし。隊伍のうちへ走り入る折から。耳目官全廣ハ士卒に先だつ。馬に指ま。間ちかく追迫りけり。と見えれバ。松寿が一軍の人馬。路を横ぎりて前にあり。されバこそ。曚雲法王の前見に露違ざりけれ。とく引かへせと。いひも果ず。馬の平首引回らして。辨嶽のかたへ馳去れバ。松寿も。敵の謀あらんことをさとりて。これを追ず。且く人馬を休ませ。逃れ來つるものども。鷲巣山にて。趙豹李虎が撃れつるに。終ハ岨を滾落て。生死もしらずなりしに。亀が敵に射縮められしに。一五一十を告けれバ。松寿ハ

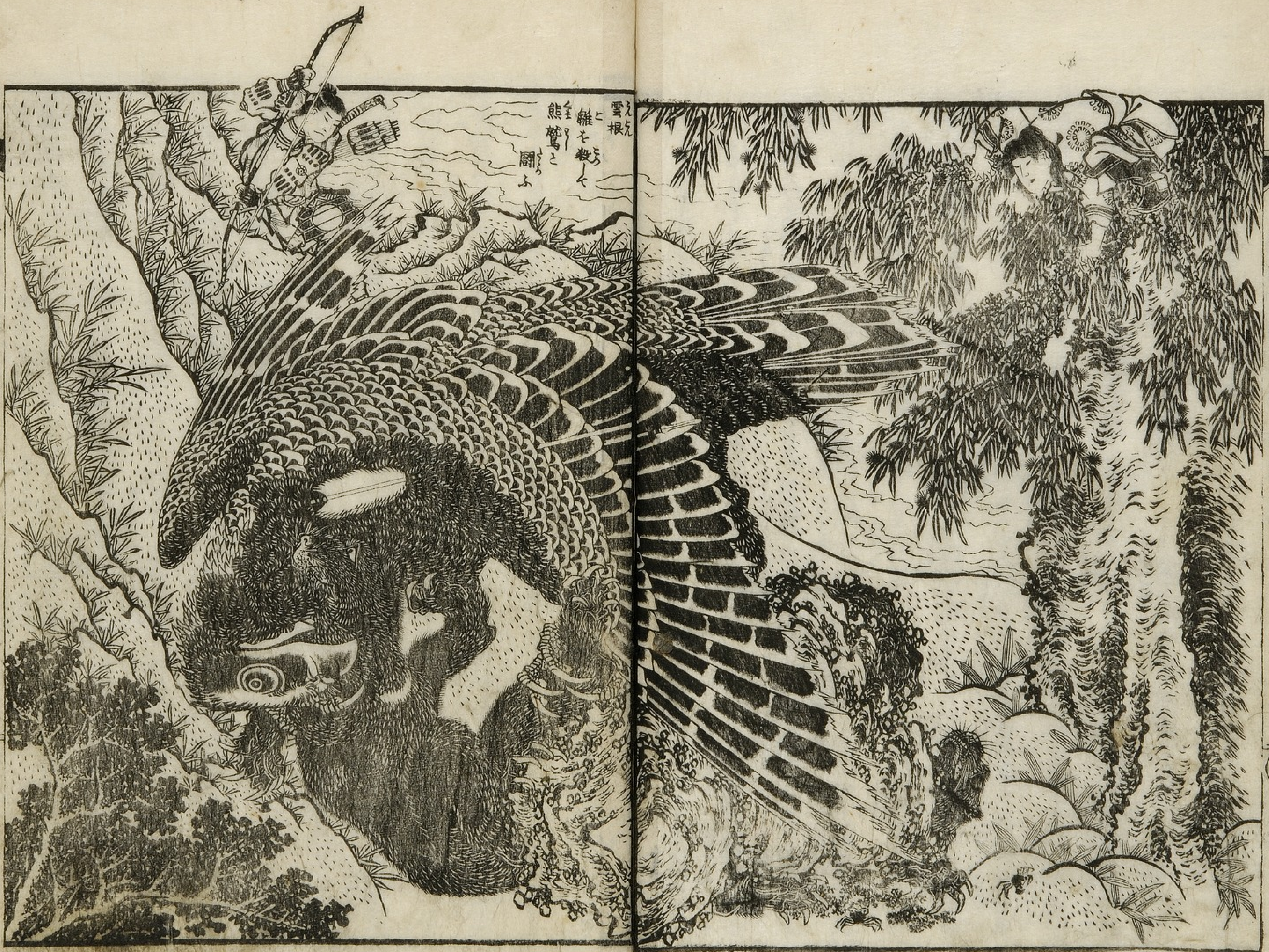
救ふる手の遅くして。鶴亀兄弟をうしなひたるを。ふかく後悔し。やがて長川に立かへりて。諸軍を引率し。南風原の城に入りて。利勇に事の趣を告しかば。利勇は憑みきつたる趙豹李虎を撃して。歯をかむといへども。鶴も又深谷へ落つくらんに身は木石に打傷られて。微塵になりぬ。亀は朦雲が軍兵に射縮られて。いかで脱れん。彼兄弟既に死されば。只これのこ後母をかりど窮山に蹤び。亦松壽に倒くいへるをれは。朦雲曩に。鶴亀を賺して。これを刺せんとしかども。却亀を射さしゝかば。いかなるこゝろなりけん。此るみつやく量知がたし。といへば。松壽微笑く。鶴亀は忠孝無二の少年なれども。彼等いまだ朦雲が毒悪なるを暁らずで。よりてその謀を稟て。昨夜大臣を害せんとせしに。事ならず。朦雲先これを猜して。亀を乱軍の中に射さしゝなれ。おのが奸計をかくせじとの為なるべし。さればあざさぞやといへば。利勇は舌を巻て。ふかくその梟雄に怕れ。為朝三日と約して辨嶽へ赴れしに。今に帰り来ざるは。いと怪し。這奴も又朦雲が間諜者なるべし。よしや帰り来るとも。既に三日に後れたり。城中へ入るゝに及ず。その旨こゝろ得べしといへば。松壽はいぶかしげに眉根をよせ。いかなる為朝を日の本の皇孫。蓋世の勇将なり。決して朦雲に従ふべうもなし。大臣疑ずして重く用ひまうぞ。王子を舊都へ還しまゐらせんと日を僂てまつべしと。いはせも果ず。利勇忽地に氣色を變じ。軍師いかなれば。ことを仇とし。寃に鶴亀を助んとして。趙豹李虎を失ひし。今亦出處不定なる為朝に荷擔して。頻にその武勇を稱るぞや。それは是托孤の大臣。國の治乱當にあり。王子をば活さんとも。又死さんとも。心のはまさる随なるに。讒言せば罪免しがたし。その首惜からずば。諫めいへといれまくふぞ。松壽は

黙然としてゐたりけるぞ。袖かきあはして退出たり。其下某生再説。鶴は鷲巣山にてころぶも。弟亀が援を得く。趙豹が刃を脱れ。李虎をさへ砍伏せたれど。鮮血に岨を踏辷して数百仞なる谷底へ滾々と轉び落るに。誰かしらん山の脚に。いと大きなる栗の樹ありて枝葉参差として生繁り。さながら棚を架て氈を敷たるに異ならざれば。その樹の叉へ落とゞまりたれば。幸にして身を傷らざれども。膽をうしなひて息絶たれば。しばし人事をしらざりけるが。さるからに亀は樹のうへに兄があるとはおもひかけず。兄が呼ぶかな答なければ。なほ彼此をたづねめぐりて兄弟終に得もあはず。かくて程なくその夜もあけて梢を拂ふ山下風は冷に。おく露の降かゝりて。鶴が咽喉を潤しければ。忽地に甦生して頭を擡と見かうれば。足曳の斧もいらぬ山猿なるぞ。怪しや我は梢にありその樹のたかさ三四丈も

あなうしとおもひしれに。下にはたえて枝もなければ。足を踏かけんすべもあらず。これいかにしてのがれんと思へども。すべもなかれ。鶴の命のおもひ所滞るかひなきてふが身にぞ。思ひすゝむ弟がうへいかなりけんとぞかりに。胸くるしさへ添や。まして翅ある子も蜘蛛の網にかゝれ。蝴蝶の夢の世を夢と悟れど饑疲れて。おぼつかなくも直下せば。樵夫のかよふ路ありけり。峠はれめしてとちしぬ。くなる人あらば呼とめて救ひを求めばやと思念して。只いさゝかにまもりゐたる時は十月の下旬なれど。国暖にして木の葉凋ず。栗子熟て未落も尽ざれば。これをとりて飢を凌ぐに。氣力いと捷なりぬ。浩処に前面なる巌の蔭より。いと大きなる荒熊の子を連るが出来り。石湧にそゝぎて求食て。樹の下よりちかく来よりて。何をするかと見る程に。谷川のほとりなる嵓を楚足と抱きあげて。下なる澤蟹を。雛熊にぞ拾はしむる。鶴はこれを見てぞふかしき。寔に

いきとし活る物子を慈むはかくこそありけれとハしりながら。されハ今。親の仇人を撃難て。かへをよしなき父母の恩さへ形なき世なりなんとぞおもふなる人を身にしみてこそ涙けに禁るものへど。目を拭んとすれバ忍かざども。揺りけれバ栗の子ハ。霰めりてちら〳〵と熊の上にぞ降かゝれ。牝熊これに驚きけん。抱し嵓を撲地と落せバ。拂ふべし下なる雛熊ハ忽地嵓に打挫かれ。鮮血を吐きて死にけり。牝熊ハこの景迹に。ますそく慌忙て。ふたゝび嵓を挽起せど。子ハはやいたく打拗き板のごとくになりしかバ。悲鳴くこと限なし毛類の浅ましさへ。わが殺せしとハ思ひもうけど。又樹の上に人あるをしらず。左を見かへて。右を見かへて。そもわが子をバ何物がかく殺せしと思ふ気色の。いとおどろかしく。四方を睨で嘷る折から。羽あらし颯と音さして。彼岩頭に落るものこれ鷲なり。その容ハ熊に一倍して。觜より尾頭に至て。十尺

にもあまるべく。左の翼を矰箭に縫れながら。ふたゝび翔もやらざりけり。熊ハこれを佶と見て。わが子の仇よやとおもひけん。奮然として跳かゝて鷲の胸先へ爪を打かけて引裂んとするに。鷲も亦熊の向脚を撮摑鐵のごとき觜をもつて刺ながら上になり下になり互に鮮血に塗れつゝ。挑ミ戦ふて引もぞ。鷲ハ諸羽を引裂れ。熊ハ吭を突破られて。もろともに死にけり。鷲ハ遂にこれをしりて。熊ハその子の死る故をしらざるハ。性の愚なるところなれバいふにもたらず。只その敵を見て。苟も退かず。実にこれ猛獣の長なり。されども彼鷲箭に縫れながらも。熊をも引裂破りしぞ。しからバわれもかくてあらん。いと危かりしと舌を掉て。只顧に驚嘆を折しもあれ。麓ちかき山本より。峯上の雲が葉とてや。年の齢を。二十八九なるらんとおぼしき壮士。鹿の皮の行縢して鷹の羽の矰箭を

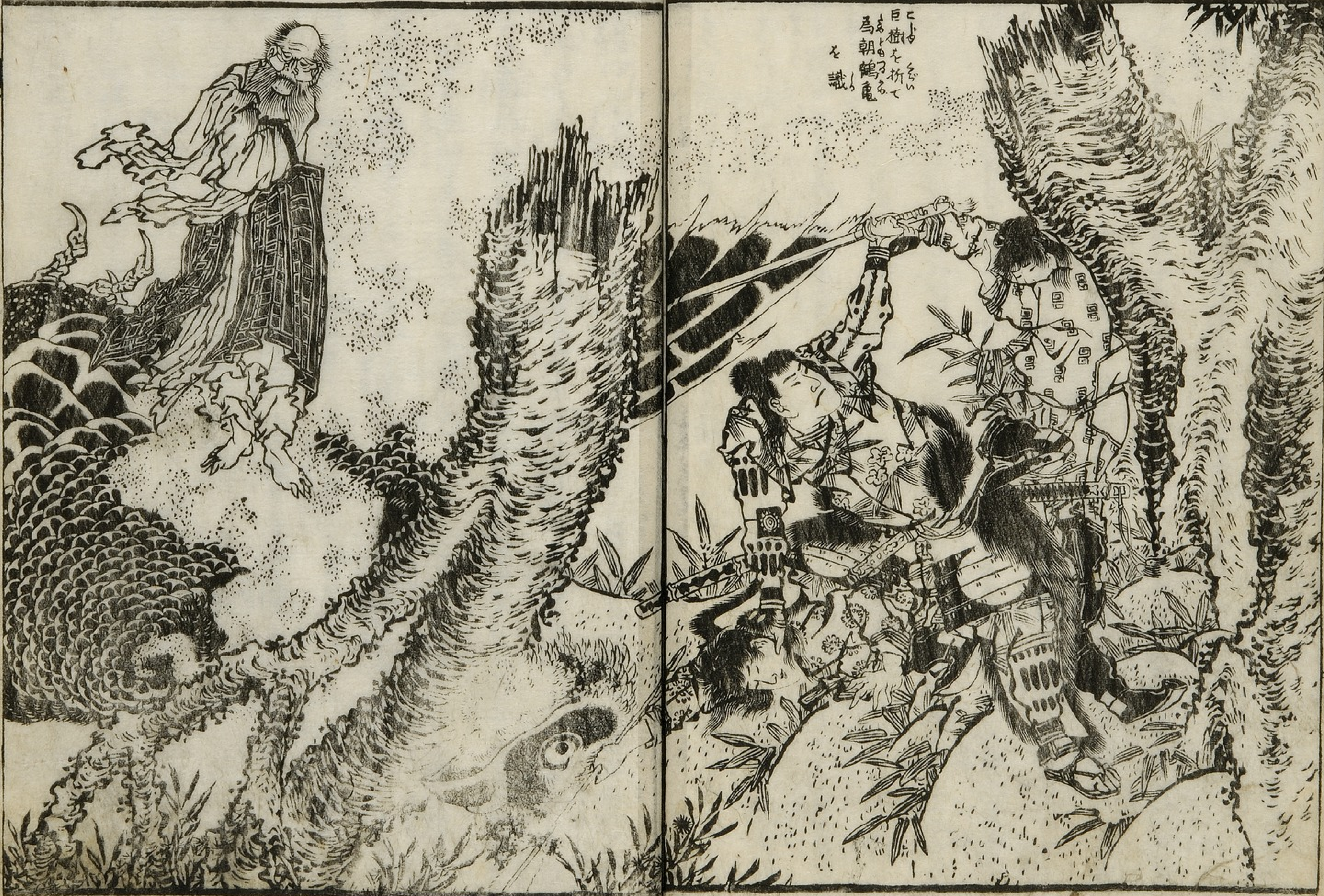


雲根と雛を殺して熊鷲と闘ふ

眉滋藤の弓ハ。握り太なる真中把て。驀直に走て来る死たる鷲と熊
とを見て。莞尓とうち咲て。両虎食を争ふて傷くときハ。猟者労せずして。
これを獲よりと云。これに等しく。これ今一隻の鷲を射て。これに二疋の獣を
得るハ実に不思議の獲なりと。ひとりごちて弓と箭とを投捨て。腰なる短刀を
抜出し。鷲の頭をうち落せバ。怪しむべき。残口より白気隠々とたちのぼりて。
なかぞらに浮して滅失けり。鶴ハとこれを見て声を発。樹の下なる人。これを救
ひすべしと叫びしかバ。件の壮士漸しげなり。うち仰ぎて。汝ハ何ものぞと問に。鶴答ん
として。まだものいはず。この人の形容を見るに。身の丈ハ八九尺。筋骨逞くして。
声ざまも亦尋常に異なれバ。猟者にハあらじ。又利勇が士卒にかゝる勇士
あることを聞ず。こハかならず首里より来る間者にこそと推量して。ふたゝ
び声を高くし。われハ曚雲國師に。扈従し侍る里之子なり。前夜故ありて。

利勇が兵士に擒よせられ。首刎らるべかりしに。不思議に脱れて。この樹の叉
に滾落。進退窮りてせんすべをしらざりしに。列卒縄あらバ投あげて。扶おろし給へ
かしと実事虚言うち雑へ。さりげなく憑こと聞えしかバ。彼人ふかく歓びて答へ
得させぞ。捨たる弓を拾とりあへず箭を刺て。満月のごとく彎固め鶴に對
て発さんとするを。彼人ハ樹の上より。大に驚き。これに何ぞの恨ありて。射ん
落さんとハせらるゝなる。望ある身も脱まがらぬ命なりせバ惜むにハあらじ。
縁由をきかでしなれべ。これむざんと情なしと叫びつ。勸解つゝ繞る樹の梢ハ高く
葉がくれて顔ハ定かならねども。緑由基が箭をとりかねて。幹を抱きて
腸を絞るごとくに叫びしかバ。獮猴もかくやとおもはれて。いと不便とおもひけん
ふ。いハ木にあらで壮士ハ。仏けよくも声を励し。縁故を告されバ情なしとて
怨こともせず。われハ原来大日本天皇の庶流にて。鎮西八郎源為朝と

呼るゝもの也。故ありて故國を離れ。佳奇呂麻に漂著して。大臣利勇が招に應じ。南風原に赴くといへども。利勇狐疑して。三箇條の難義を課せよく。この事をなし果さば。かならず重く用ひんといへり。第一條ハ。小録の港口を塞ぐる事。第二條ハ。辨嶽なる鷲を射てとる事。第三條ハ。曚雲が兵士を討とる事。すべて三日を限りとせ。かくてこれ立地に港口を塞ぎて。辨嶽にのぼり。既に三日ハ過せども鷲をえず。又敵に遭ず。四日に及ぶ今朝に至りて。鷲を射てゆくりなく。この処に追蒐来ぬ。曚雲が手のものと名告をいはで放すべし。汝に怨なしといへども。國賊に従ひしかバ天罰ハ得脱れず。されバあひしハ命運の竭る処と観念して。潔く首を得させよ。南無阿弥陀佛と唱もあへず。よう引標と切て發つ。窺を外しなどしけん。その箭鶴が身にあたらで。いく世経るらん高木の幹の中央を射たれバ。壓折るごとく。減離と梢忽地地に下て。鶴も小枝に攫りてしまゝに。聊も身を傷つけずながら地上に在りしかども。曩に劔ハ失ひつ。身に寸鐵を帯ざれバ。鷲に立られし箭を抜とりて。為朝を刺んとする処弓手で丁と打落し。ものくしやと猿臂を伸して。鶴が項髪むんと摑。捻倒して膝に組敷首を掻んとして。はじめてその面を見たれバ。いと﨟闌たる少年なり。わが身をまもるよすがとなるとも。かゝる美少年を撃んハ勇士の羞る所なり。助けばやとおぼしつゝ引起さんと志す折から。亦一人の美少年。喘く走り来ぬ。小太刀を電光のごとくうち振りて。為朝を砍らんとするを。見えてみづから身を反て。又その刃をうち落し。組んとするを引よせて。肱腕にかいこみて動しもならで。是彼をつくゞ見て。まづ下なるを引起し。汝等が面影の。よく肖たる胞兄弟なるべし。いかなるものゝ子なれぞや



こゝは　ゑらい
巨樹を折て
まとゐつる
為朝鶴亀ら
を識

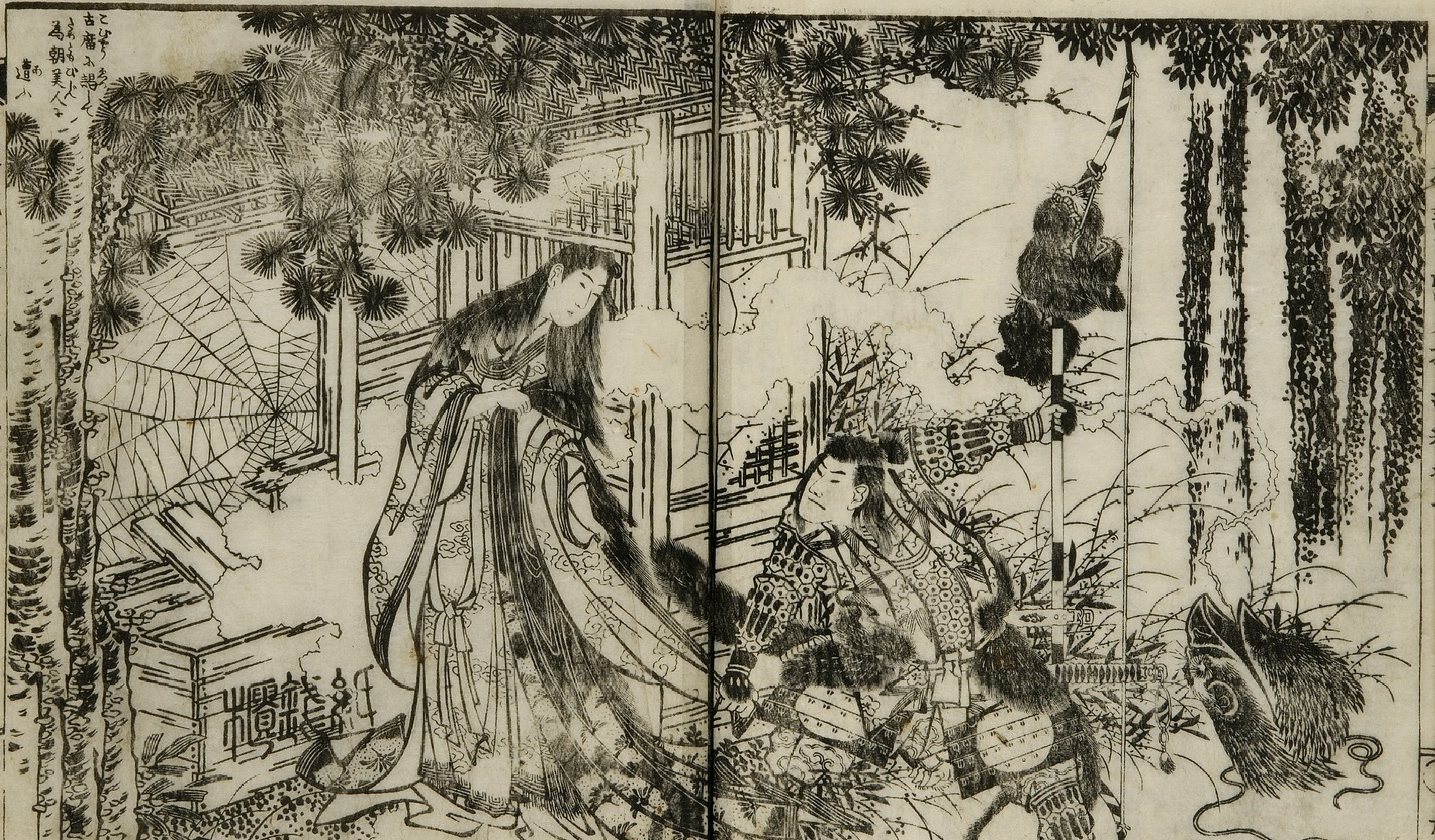
時宜によらバ命を助んとて。名告れと宜へバ。鶴亀ハ歯を切て。かくまでに運竭て兄弟ともに死するとも。憐む人もなきものゝ。ふたゝび危難を脱れて。弟ハ兄を尋めぐり。兄ハ弟を思ひ出る。命強顔環會て今亦足下の擒となれり。これ是過世の悪報と思ひ締れバ只この國の人ならバこそ名告るとも。かひなからん。鷲る巣山の鷲よりも猛き心に恥ざれども。あはれとふなよ。父母の仇人におくらるゝかりが首を。いかなるものと人問バ。毛國鼎が孤なる鶴亀なりと答ねど。いと潔くいひもあへず。兄と弟が健氣さにさてハされど為朝ハ小膝を拍て驚嘆し。左手に抱き縮める亀を放て塵うち拂ひ。いかにもの人の言に名をきくに。面をみるに不如といひつゝこの者共。これ決して汝等を害せず。為朝故國に住ずしてかゝるところに漂着せし縁故ハ。一朝に說盡すべうもあらねど。むかし放せし鶴を索て。空山

にこの國へ推渡て。舊虬山の麓にて。王女廉夫人の恵を稟。大蛇の珠に代りし。その舊恩を復さんとて。小琉球に王女を救ひて佳奇呂麻ば荒礒に潜しられハ南風原に赴きて。かの曚雲を討滅して後に利勇等が。罪を正さんと思ふのミ。真實彼が助れになるぞ。汝等親子兄弟の忠孝を。寧王女の物がたりに聞しが。救ひ出さんと思ひながら。いまだ身容られざれハ後をあはれむに違ずや。いと痛しくも胸苦しれ為朝が誠ちがはず組きさゝるこれ撃果さバ後に志れともかひあらんや。さて危れども危かりし。今鶴亀どもる欲びハ。舊虬山の麓にて鶴を放るに異ならず。はやく佳奇呂麻に赴きて。寧王女に給事よと。叮嚀に説示すの人ハ。鶴亀これを実なりとせざるぞ。さすが同胞ハ。小琉球の嶋北にて。討手の兵を防ぎ戦しが。汝が王女を救ひ進らするところぞ。されバこそ勢竭て虜にせられ。首里に到て思ひもかけず。曚雲國師の憐愍を

被り。その誠心を知れるのことなくぞ。寧王女ははや王宮にかへしまゐらせ外ながら見まもらせり。よしや言を巧にして他人を欺くとも。吾僞をいふて欺き得んや。さてぬるくび勝負を決し。汝が為に撃るるとも誰を訪んとてかくるべくと。佳奇呂麻へ赴くべきっと同胞一斉冷笑へば。為朝すさまじく嗟嘆して汝兄弟怜利といへども年少なれば玉石を辨せず。汝等を賺せしは曚雲が奸智にして王女がおぼつかなくみえさせるは。亦是者奴が幻術なり。それ汝等を欺きて何の益かある。膝の下に組布あくらっ。その名を仮て助しるて。偉の虚実はしるべきなり。それ半世の勇をもりて。いまだ利勇が罪を問ねど。況て汝達が小腕をもて輙くなかを遂げし。且く佳奇呂麻に身が躯して忠を王女に竭せよ。それ時を得ば共に討て親の仇人を撃しかん。ゆめゆめよく漈念して迷ひをとれよと諭しかへば亀は頻に驚嘆しこれにて思ひわかれば。この暁に首里の大将耳目官全廣がこれを救ふで矢石を飛し射て殺んとしたりしを。曚雲が詭の謀を志るに足れり。然れども彼のこひしとその身も谷に滾落て。鶴が往方を索るに。舊の処へ立かへれば兄が組布れるとぞ。これを助んとせし顛末を。おちもなく告にければ。鶴も暁りてふかく慙愧し。感涙ゆるに袖を濡らして為朝にまうすやう。某兄弟思慮浅くむく曚雲にそかられ。かるがしく南風原の城に潜び入て。みづから鞅を醸し。赤眼暗して英雄を認ず。十囲にあまれる大木を只一箭に折かしのふ弓勢もりて某を射まへざりしは。ふかくろありてのことなるべきかと疑ひちまりしこそ罪ふかけれ。君は是日の本れ皇孫。まだ寧王女の恩人なり。三箇條の約を定めて手を空しく帰りまたば。利勇いよく用ふべからずと。これも捨られ身にしあれば。鶴が首を刎て利勇におくり。蹤跡をあらば弟

亀が仇人を撃よすがとなるべし。さて撃ぬ人とさし寄て。項を伸て見がうん退亀こそ捨べれ命なれ兄公ハ存命時をまちて。阿公を撃利勇を撃。この世あの世れ主親へ忠孝を盡してたべといひつゝ座を合掌し恩義に勇めバ死をさへも辞せず。その争ひや君子なれ。この兄にしてこの弟。いと有がたき少年なれと為朝頻りに嘆賞し。これ今曚雲が士卒が撃ゐるざして課役一箇條を缺に似たれど。さうらへどもその熊を獲つ。夫然ば男子の祥春は出て樹に登り。冬は蟄りて穴に入り。勇を好みて義をしるものなれバ二頭の熊をもて兄と弟が首に代。大臣利勇が欺くべき謀はかなうべし。密かに告知らして熊の頭を打おとし。亦その膽を掛出して。これを鶴亀に与へて宣ふやう。熊膽は得易からぬ故にその價最貴し。ことを腹せば心を清し肝を平にし目を明はして翳を去。蛕蟯虫を殺す。汝達その一ッを售て路費とし。一ッを寧王女に進らせよ。彼処に至らバつゝがなくも。わが亡妻のうへまでも審に志すよしあらんかならバ人にな怪れそ。ゆゑ孫と促したまへバ。胞兄弟これを受捧て。地上に額つき。誠に君ハ仁義の人なり。この再生の恩をおもへバ鷲巣山もなほ低し。世のうちに雲れたるぞましひ。ちぐし隠るゝ月の觴れ。くまとりゆる丘代ハ過世の宿世因縁なり。然中の哀訣ハこゝに説も竭しがたし。命あり時いらバ再び遇りあひそらうに那の佳奇呂麻船に便もとめて彼島に推渡り。王女に猝の趣を告まうさんと答果て。兄弟一斉身を起し。いとゞ露けき谷蔭の。旦開の風の吹入る袂を女がてもちつゝ。為朝を鶴亀を樹がくるゝまで目送りて。警と然バ二ッの頭を。藤蔓もて繋よし。弓に引かけて肩にのし。路るれ路をたどる。辨嶽の麓に出るへ午の貝ふくころなりたり折もあれ。

この山蔭に住居する。樵夫獠者等が茅家二三十戸。悉くうち破られ。一村の老弱男女或は斫仆され或は疵を被り。道の辺に泣くをり。為朝これを見そなはしかくて。その故を問給へば。答いふやう。この処は南風原どのゝ所領なりしが。曚雲國師の大将に全廣といふ猛者。南風原を攻んとて。軍兵を出されしに。糾策合期せず。いさゝかに立帰るを面目なしと。やおひなん数にも足らぬこの里を。かくは乱妨せられしなりと。かこちげに。かゝれば為朝これを聞もあへず。その軍兵何処にある者奴等が首級の。いとはしれに。鑿はして取らせてべくれと。憑しげに宣へば。里人等又いふやう。それはこの曉がたのことなれば。今は遠くに引退きぬ。よしなきことなのたまひそ。何処の人かはしらねども。南風原へ赴れなば。そが為に大臣に縁由を訴てよべ。これの執こまかするといふ間に為朝は懐より薬劑一包をとり出し。われは日本の漂客に。為朝といふものなり。齎したる薬こゝにあり。これは金瘡に極めて妙なり。おのおのうち用ひよかし。南風原に到なば。縡の趣をまうすべしと。叮嚀にいひ慰めて。件の薬劑を遍くあたへ。里人等これを受くうち戴き。歓ぶこと大かたならず。かくて為朝は。全廣が撞見ざる城。迷域おかせどもさてあるべきにあらざれば。この里をうちたちて。川良のうらへいそぎ給ふ。拝嶽の山脚なる林原に入給へば。人跡絶て樹立隙なく。蒼ひと暗きかたに。ふりたる山神廟ありけり。こゝに至りて弓に掛たる鷲の羽忽地に縛び落たるを拾ひあげて結ひそえたまふ。亦滾々と轉落たるものあり。かしやと掻き抱きて。とみれば。古廟の宝前に。大なる散錢櫃あり。これこそ究竟の物なれと立よりて。そのほとりに立まよへば。廟をのぞく荒はて。狐兎の蹤を印し。棟梁かたふきて。鴟梟棲を得たり。いかなる神か



古廟（こびやう）に謁（えつ）して為朝（ためとも）美人（びじん）に遭（あ）ふ

祭りたる檐に扁額なく。内に神體あらざれバ。人も詣来ね古廟に散錢櫃ハありとも益なし。亡の跡をこの櫃に。納めてゆかバ便宜ならん。これ借まじとて手をかけて打よる盖をかいやりけれバ。思ひもかけず櫃の内に一人の美女躯まろくなり。此彼ひとしく面をあはして。とかくいふこともなかりに。互に呆れて怪しみ。立出る女子の袖を。爲朝むずと引とゞめてつくづくと見まへバ。眉いと素くして楚臺の雪をも欺くべく。黒髪の長く匂やかなるハ。未央の柳かと疑はれ。ふりはえ衣に留る奇南殘りて。その容姸しかりし西施がいまだ呉宮に入らざるとき。野花偏に目に艷く。小町が玉簾を吟ずるとき暮雲月を吐に似たり。これは是神歟人歟。次の巻を續ゑてしらん。

椿説弓張月拾遺巻之二畢

絵用

極彩色帳